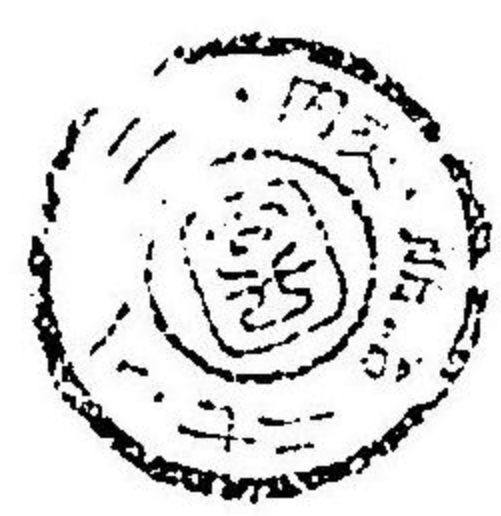


2413

9-327

寫眞事歴



宇宙萬象を捉へ來て之を一片の玻璃板上に載せ百歳の
下千里の外坐ながら目睹せしむる者は寫眞術なり世に
斯術ありてより人間の知見を廣め文明の化育を助けた
るの功決して鮮少にあらざる也

寫眞術の西洋諸國に行はるゝや久し然れども其我國に
行はるゝに至りしは近時の事とす茲に寫眞術の我國に
傳來せし事歴を討ぬるに弘化の初年櫻田久之助なる者
あり幕府の旗下某の家に和蘭渡來の銀板寫眞を看、西
洋文明の國寫眞術なるものあるを知て之を學はんと欲
し苦心慘悴遂に成就す本邦寫眞術の開祖下岡蓮杖即ち
是なり

蓮杖本姓は櫻田氏通稱久之助文政六年二月十二日伊豆

下田に生る父櫻田與總右衛門浦賀船改御番所の判問屋
なり

往時將軍家康天下を一統し諸國に關所を建つ伊豆下田
は東海の要衝なるを以て恩顧の旗下今村彦兵衛父子に
其地を賜ひ海關を設け之を船改御番所と稱し往來の船
舶を警査す彦兵衛の率ゐる所の足輕は大坂の役に從軍
し勤功ありしを以て請ふて同心とし其老後隱居したる
者を諸廻船の請負問屋とす關左より來て江戸灣に出入
する船舶は問屋の證券あるにあらざれば通航を許さ
るの制なり元祿十六年以降下田の地二回海嘯の侵す所
となりしかは享保五年御番所を浦賀に移し判問屋中由
緒正しき者六十三人を擇て浦賀に勤番せしむ與總右衛
門は其一人なり問屋創設の初に在ては同心の隱居を以
て勤務せしも承應二年同心の嫡子は其本務に従ひ二男
をして問屋を相續せしむるの制を定む蓮杖は三男なる

寫眞事歴

を以て家を嗣かす出て、岡方村土屋善助に養はる幼にして書を好み年甫めて十三畫を學はんと欲し密に家を脱して江戸に上りしも意を果さず足袋屋の丁稚となり居ること幾干ならずして稍や裁縫の技に通せり然れども素志其志にあらず一日來て足袋を買ふの客あり其人頗る倨傲隻脚を掲げて足の寸法を取らしむ蓮杖仰て其狀貌を熟視するに年齒五十許りなるへし謂はゆる商家の隱居爺なり蓮杖退て嘆すらく鉅萬の富を積むも終生他人の足を拜せざるへからざる歎と此に於て斷然主家を辭し頼る所なきを以て悒々として郷に歸れり

天保十四年將軍日光御社參に際し下田に砲臺を築て營備す小笠原加賀守土岐丹波守奉行たり新たに同心の隱居及び部屋住の輩十五人を召して砲臺附の足輕を命す蓮杖亦た徵中に在り柔術を佐久間眞太郎に學ひ劍術を小山金平に學ひ砲術を中島茂一郎に受け共に得る所あり

を學ぶものは蓮杖の外之れあらざりしかは鐘愛群に拔て早く董字を興へて董圓と號せしむ蓮杖か旗下某の家に銀板の寫眞を見るを得たるは此時にあり抑も銀板寫眞なるものは嘗て長崎に渡來せし和蘭船の齎らせるものにして海内稀有の奇品なり展覽の際氣息其面に觸るれば影像忽ち消失すとなし口を掩ふて捧け觀せしむ其大さ今専ら世に行はる紙版に比して稍や大なり銀を延へて板とし男子の立像を寫したり是れ即ち西洋に於ても紙版に寫すの術を知らざりし時の製なり蓮杖一見其妙に驚き何の畫なるを問ふ應て曰く器械を以て寫せりと聞く蓮杖意へらく妙技毛筆の及はざる所世此の妙技あり豈に區々毛錐を弄するに忍ひんやと筆を折り刷毛を碎き茫然たるもの數日遂に之を學はんと決意す嗚呼徳川氏覇權を握りてより二百餘年内を治むるに専らにして大船の製造を禁し港を鎖して交を外邦と絶ち

り試砲の際蓮杖茂一郎に次て射撃の好手と稱せらる當時邦人大砲の射撃に慣れず觀者耳を塞て戰慄したりとなり日光御社參畢り翌年八月海岸營備を徹す蓮杖等足輕を免せられ功を賞して黄金三兩を賜ふ是より先き蓮杖名師に従て書を學はんと欲するの志切なりしか時偶ま下田砲臺の同心中鹿子畑繁八郎なるものあり其舍弟董玉江戸の畫伯狩野董川法眼の門弟なりと聞き繁八郎を介して董川の門に入るを得たり然るに其頃外國船の我が邊海に出沒するもの往々ありければ幕府浦賀に砲臺を増築して警衛を嚴にす此に至て蓮杖亦た復た召されて足輕となる是れ本意にあらずと雖も土岐丹波守下田より轉して浦賀奉行となり特に蓮杖を徵せしかは默止するに忍ひざりし也因て幾干もなく事を以て辭して江戸に復り董川に従學すること初めの如し董川蓮杖の才敏を愛し特に伊豆は其祖の郷貫なるに拘らず來て畫

足、五畿入道の内を出てす眼六十餘州の外に及はす歐米の艦船時に邊海に來航するものあれば呼て蠻船となし夷狄禽獸となす此秋に當りて彼國の技術を觀其妙を感して之を學はんと欲す道に篤きにあらずるよりは得て及ふへからざる也獨り憾む活眼蓮杖の如き者ありと雖とも國禁の許さざる所獨力の能く發明し得へきにあらずるを然れども蓮杖志切にして難きを辭せず近時外船の浦賀近海に來航するもの時々之れあるを憶ひ浦賀に往て謀る所あらんと欲し師に乞ふ聞く者皆其迂を笑ふ蓮杖敢て意とせず弘化二年某月日浦賀に行て平根山砲臺の足輕となり日々望遠鏡を把て觀測するを任とす居ると一年有餘米船二隻相率ゐて浦賀に來るに會す按するに外船の我が相房海に來航せしは文化八年英艦の霧中に泊し去りしを嚆矢とす是より先き幕府令を發し内國船の洋中を來往するに際し外船の航行するを見

は速かに浦賀番所に訴ふるの制なりしかは東海を通航せる三州平阪七郎兵衛なる者の所有船之を發見し御番所に訴へ奉行佐藤美濃守江戸城に注進したりき後文政元年英船一艘浦賀に來泊し直に歸航し同年英船又一隻我が漂流人を載せて浦賀に至る奉行小笠原正應接し漂流人を受けて返す天保八年六月米船一隻浦賀沖海鹿島の傍に來る當時外船來らは直に撃拂ふべきの嚴令あり奉行太田運八郎指揮して平根山砲台より一彈を發し其の久里濱沖に仮泊するや押送形船に大砲を載せて往て米船を撃たんとす米船急に碇を抜き一書を近傍の漁船に投して去る其言に曰ふ我船薪水に盡て此に至る然るを理由を問はずして發砲するは不法なりと奉行書を收めて閣老に執達す閣議之を理ありとし爾後外船撃拂ひの令を廢す此の米船に次て來りしは即ち此回の米艦二隻にして時は弘化三年閏五月廿七日なり

前一日浦賀に入津したる尾州中洲の廻船彦九郎なる者二十二日三州大山沖に於て外船一艘を見たりと御番所に訴へ又た三州高濱の廻船助八なる者廿三日遠州新居沖に方て異國の大船一艘漂流し廿五日に至るも尙ほ遠州洋中に在るを見たりと訴ふ奉行大久保因幡守直に之を江戸城に注進し後報の到るを待つ二十七日朝關西より入津せる廻船集て八十餘艘に及ぶ就て外船の踪跡を質すに一は二艘を見たりと曰ひ一は一艘なりと曰ふ言同しからすと雖も外船の遠州洋中に在るは復た疑ふべからず此日蓮杖は早晨平根山に登りて望遠鏡を手にして遠近を觀望するに丑の下一刻なるべし安房の南端洲の崎の沖に方りて一物を視る始めは筈を立てたる如く次は開かざる傘の如く又た忽ちにして枕を伏せたるに似たり雲時にして外船なるを知り急に奉行所に注進す奉行大久保因幡守直に平根山に登りて外船を迎ふるの準

備をなす時に一隻船あり港口より馳せ至る舟子十六人裸體艦を操り快駛箭の如く御番所に近く御注進くと叫ふこと急なり是れ三崎の漁船にして外船の來りしと報するなり既にして三崎役所其他の注進陸續相繼ぐ奉行江戸城に注進し且つ沿海の諸侯に報して警備を促し先づ備付の兵船五艘に武器を積み旗幟を翻して海に浮へ以て外船の至るを待つ外船漸く進て三崎沖に至り城ヶ島以内に進入せんとす三崎役所勤務の與力佐々倉藤太郎年齒僅かに十六才勇武儕輩に援つ備付の押送形船に乗て外船を洋上に迎へ城ヶ島以内に許さず導て浦賀港外西野比村沖に投錨せしむ奉行乃ち御番所の兵船に僚屬を乗て長崎より來勤せる蘭語通事堀辰之助を通辨とし種々應接せしむ外船は大小二隻共に帆走船にして北米合衆國の軍艦なり一は艦長四十五間檣三本砲八十門人員八百人一は艦長二十二間檣三本砲廿二門人員

二百人なり其來意を問ふに我國と互市通商を求むるためなりと答ふ因て之を江戸城に注進す江戸詰浦賀奉行一柳市太郎亦た來て大久保因幡守と共に諸軍を指揮し嚴に兵備を治め近國の諸侯も亦た兵を出して防備を整ふ廿九日米艦飲料水を乞ふ在港の商船を以て送ると三日間、六月三日奉行命して浦賀港内に碇泊せる千石以上の大船十六艘を臨時用船とし益々武威を張る談判數日にして閣議通商を許さるに決し六月五日を以て決答せんことを約す期至る和戰の機懸て此日に在るを以て兵備更に嚴なり奉行大久保因幡守は平根山に陣し一柳市太郎は霍ヶ崎に陣し木更津藩主保科能登守は平根山下に在り館山藩主稻葉兵部少輔は霍ヶ崎の海邊に陣し小田原藩主大久保加賀守は津久井濱にあり勝山藩主酒井安藝守は久里濱にあり川越藩主松平大和守は鴨居崎より觀音崎一帶の地を占め忍藩主松平下總守は安

房富津の附近を占め皆多少の兵船を浮へ特に松平大和守は兵船五百六艘を出し松平下總守は兵船四百八十六艘を出し相房沿海の地は残す所なく陣營を布き連ね旗幟を建て篝火を焚て兵の多きを示し士卒の帶する所の刀は短を撰ひ槍は柄を切りて艦内の動作に便ならしむ既にして四方に艦装せる兵船は鉦鼓を鳴して一齊に進發し米艦の周圍に群集すると雲霞の如し應接主事の兵船は米艦の艦に近く川越藩の兵船は左にあり忍藩の兵船四百八十六艘は其右にあり此他小諸侯の兵船各宜しきに隨ひ旗幟風に翻り槍刀日に輝き燦として海上數里恰も春花の爛熳たるに異らす應接主事米艦に上て彼の使節に面し互布の要請に應ずる能はざるを答ふ其理由とする所は我國數百年港を鎖して海外に通商せず今ま一朝にして國禁を解く能はずと云にあり米使其謂れなきを論するも我れ固く執て動かす米使我心の奪ひ難きを

を知て竟に之を諾す此に於て士氣始めて鎮靜す翌六日幕府米艦に米穀蔬菜果物の類を贈り川越忍兩藩主は竹細工及び漆品を贈る米使我か好意を謝し又他志なきものゝ如し然れども萬一の變あらんを慮り應接主事の一行米艦を去るに臨みて水泳を善くする同心大久保孝之助外一人を止め事あらは直に海に投して合圖を爲へきを命して去る然るに應接主事去りて後須臾にして米艦端艇を下して川越の兵船に至らしむ言語通せず來意を知らず我か士卒誤て米艦異變ありとなし争ふて刀を抜き艇中の米人を斬らんとす米人亦た怒て急に米艦に還り戦争の準備をなす艦中に留まりし大久保等急を應接主事に報す此に於て我亦た號令を諸軍に傳へ應戰の準備をなす我か士卒大に激昂し一令の下に米艦に切入て其將士を盡殺せんとし心生還を期せず危機一髪の間

を結ふを得たり蓋し米艦の端艇を遣はせるは贈を受けたるの恩を謝し歸帆の日時を告るかためにして他意あるにあらす但た彼れ川越藩兵船の旗幟美なるを見て之を應接主事の用船と誤認したるより端なく波瀾を惹起したる也越えて七日米艦退帆せんとするも風位宜きを待すして開帆に便ならず依て我か小船數百艘を以て二艦を曳き房州洲の崎沖に至て之を放つ煙波渺々其行く所を知らず此時に際し蓮杖は書を善くするの故を以て米艦を圖するの命を受け來泊の初日筆墨を携へ扁舟に乗して艦に至り尺度筆紙を示し手を以て舌に代へ以て來意を通せしに彼れ之を察して敢て拒まず舷端に一條の綱を垂下し蓮杖をして攀ち上らしむ乃ち導かれて艦長の室に至る彼れ剪髮師をして髪を理せしめ居たり待つこと少時艦長蓮杖の穿てる草履を取り諦視稍や久うして之を返し狀貌を熟視し其手つから蓮杖に穿たしむ

蓮杖も亦た彼れの爲すに倣ひ其靴を取て着一看したるに彼れ喜へる色あり艦内の支那人を呼て蓮杖と筆談せしめ更に艦の構造に精しき一士官を呼て應對せしむ蓮杖乃ち尺度を出して分を示し十分にして寸十寸にして尺十尺にして丈なることを説き仍て艦の長さ何間幅何間なるを知り進て艦の全形を摸寫し三四日にして略ほ要概を圖す其艦に在るや言語通せずと雖も圖書を以て口舌に代へ能く意思を通するを得たり瓶子と盃とを描きても水を求むるの類迂なりと雖も事を辨して誤らず以て自分資せるのみならず又た艦に來往する與力同心等の爲めに代て辨せしこと少からす但だ彼の事情に暗き時に失錯なき能はず公堂を徘徊して前面に大玻璃鏡あるを知らず直前激衝して後へに倒れたるか如き水兵の爲めに携る所の手巾を持去られ其報として封蠟六個を受け誤て珊瑚となし火に逢ふて融解するまで之を覺

らざりしか如きの類也艦に往來すること數日寫眞の事に關しては一も得る所なし
 弘化四年四月英船一隻浦賀に來り互市通商を乞ふ亞船の例を以て返す嘉永元年四月米船二隻又た來り通商を求む後年を約して返す嘉永六年米國水師提督ペルリ軍艦を率ゐ來て互市を求む明年を約して返す弘化三年より以來此に至るまで八年蓮杖浦賀に在て外艦に接し時に公命を受けて鑿日の如く艦體を圖することありしと雖も倉忙の際未だ宿志を達するの機に會せず安政元年四月ペルリ前年の約を履み軍艦七隻を率ゐ來て通商を迫る海内騷然たり時に蓮杖遊歴して相州津久井に在り報を得て安んぜす生平の事を願ふの違なし先づ師董川の一族を津久井に移さんと欲し江戸に來て師に謁す董川大に喜ひ黄金十兩を與へ浦賀に至て動靜を視察せしむ幕府假に和親條約を結ひ下田箱館に於て外國の漂民

に消耗品を賣るを約す之を欠乏所と種す名は漂民を救ふにあるも其實は互市の一着手なりペルリ要領を得て國に返る物情稍や平かなり蓮杖即ち下田に航せんと欲し船便を求めて浦賀を發す時に正に安政元年十一月天露れて碧空纖雲を留めず氣朗にして鬢邊一縷の髮を揺かすの風なし然るに突如として船底に異常の響を發す水主曰ふ是れ地震なり恐らくは大地震ならんと雲時にして雲湧き風起り船を行るへからず因て船を相州小足代港に回せは何ぞ知らん此地海嘯の災ありて船舶の覆没せるもの港内に散在し家屋の流失せる者亦た多く慘狀見るに忍ひす蓮杖先づ其無事を祝し嶽山不動に詣て冥助を謝さんと欲し到れば即ち浦賀人近傍に碇泊して難を免れたる舟子等米を船旗に裹みて參拜するもの少からず蓮杖之に托して浦賀に勤務せる父君與總右衛門に無事を報し歸途三浦荒次郎の碑を訪ひ近傍の農家

に其辭世を見る「撃つ者もうたる、者も土器に碎けて後はもとの土くれ」翌日小足代を出帆し順風に乗して下田に航し大浦港に着く只看る港内には海嘯のために飄盪せる家屋船舶算を亂て波上に漂ひ且つ一隻の外國船横はり傍らに五六の和船あり而して一個の人を見す暫くして一船十四五歳の少年獨り殘留せるを見て倉皇狀を問へは只た曰ふ海嘯のため斯くの如し下田の家は悉く流失し人は皆な死没したりと因て直に飯を炊きて饌餉を蓄へ舟子三四人を伴て上陸し山上に衣を掲げて日に乾すを見て人あるを知り其方位に向て進み行く途に浦賀與力合原總三に會す曰く慘狀口言ふ能はずはやく町を見よと言訖て馳せ去る蓮杖等亦走て其家を尋ぬるに人家潰散して知るへからず幼時家の敷石に穴を穿ちたるを憶起し辛うして其殘趾を認め得たり然れども四邊漠として人影を見ず兎角して一個二個來り到るも

のあり就て家族の安否を問ふに知るものあり教へて曰ふ吾れ屋上に在て卿の姉を見たり一子を負ひ縁家の父母の手を引き胸より以下ハ水に没しぬたり但た退潮の時なれば惟ふに死を免れたらん速に山手の方に至りて索むへしと因て大安寺山に參りて尋ぬるに許多の避難者あり而して蓮杖の客春ハ皆命を全うして此に在りしかは一見悲喜交も至り嗚咽語なし
 蓮杖浦賀を發するに臨み角谷某の子福次郎なる者より其父に致すへき金二十兩を托せられて携へ來りしかは翌日角谷を訪ふて之を渡し更に三兩を借りて脚夫を雇ひ江戸及び浦賀に消息せんとす災餘乾きたる紙を得ず家根板を拾ふて紙に代ふ其師董川に興ふる書は一首の國風なり「逆浪に追はれて家も米もなし樂もなし死にたうもなし」と董川家に同志を會して歌會を開ける時蓮杖の書至りしかは董川之を密を示せしに成島司直圖

書頭あり嘆して曰ふ日本の和歌は斯くあるへしと蓋し其眞摯に取れる也
 後ち蓮杖人に語て曰く海嘯のために命を殞すもの多きは固よりなり然れども自ら求めて死地に陥る者亦た少なからず下田の豪富に香取屋傳八なるものあり神道を信すること深く佛教を見ること弊敵の如し此人海嘯に追はれて大安寺山に逃れ喉渴して飲を求むるに急なり傍らなる墓碑の渚水を掬して飲むもの大に嗤笑す傳八嘲て曰く吾の墓の水を飲て生を保ち他は惡水を飲て死せり知らずや一の浪來りしとて人争ふて山手に避けたるに水退くや慾に溺れて山を下り盜をなし二の浪のために浚ひ去られて死するもの多かりき是れ惡水を飲みて死せるにあらずやと又た橋本宅左衛門なる者あり病て床に臥す母齡八十を超む且つ明を失す海嘯の起るや母を伴ふて逃れんとするも進退意の如くならず恰

も好し傳馬船一艘門前に漂着す宅左衛門母と共に之に乗り流れに從て道見橋の傍らに至る時に水高うして船は恰も樹梢にあり宅左衛門船を樹に繋かんと欲し樹を攀つ母の曰く吾れ餘命幾干もあらず死するも恨なし只た汝命を全うせされは家を嗣くべきものなし且つ我を捨て去れ宅左衛門歔歔して應へす堅く樹を握む奈何せん病瘵堪ゆる所にあらざるを波浪一簸船樹を離れ身は水に落て又た樹梢に懸り母は舟中に在て行く所を知らず水退く後宅左衛門樹を下り山に避け母の踪跡を尋ぬるに昊天亦た宅左衛門をして不孝の名あらしむるに忍ひざる耶次日傳馬船は母を乗せて外船の傍らに漂着し其救ふ所となる外船は即ち露國の使節フーチャチンの乗艦なり
 フーチャチンの下田に來れるは前月にして亦た互市通商を求むるにあり然るに海嘯に逢て破壊せしを以て之

を修理せんと欲し積載せる大砲其他の兵器を揚陸し空船を戸田浦へ廻漕せんとす浦は下田を距る五里許の所にあり半途にして船沈没せしを以て一行は柿崎に趣き玉泉寺に掩留し幕府の允許を得てスクーテルを造る内國の船匠其術を知らざるも露人フーチャチン悉く指揮して遂に一隻を造る謂はゆる君澤形船の濫觴なり君澤形造と稱するは郡名を冒せるなりフーチャチン之に乗し沿海を航して本國に歸る

フーチャチン玉泉寺に滞在するに際し蓮杖は其用達となり接伴せしか其去るに及び一たび江戸に出て轉して津久井に行く蓮杖向きに津久井を去りてより消息を得ず既にして下田に航せしと聞き蓮杖を知れるもの皆以て死せりとなし蓮杖か阿津村の著姓山口市郎兵衛を訪へるの時は恰も蓮杖のために法會を營める時なり床頭に蓮杖か嚮きに其宅に留めたる蓮の杖を建て香を焚き

經を誦して冥福を營み居たりしかは蓮杖の至れるを見て幽鬼にあらざるかを疑ふものゝ如し眞の蓮杖なるを知り且つ驚き且つ喜ひ法會の筵は忽ちにして祝賀の宴に變し相共に歡を盡したりといふ初め蓮杖師を辭して相州に遊歴するに際し師恩を忘れざるの意を體し彫刻に巧みなる者琢文齋をして蓮の杖を作らしむ菴川の菴字は蓮杖の義なるを以て之に取れるなり蓮杖居常之を携へ身を離さず是より人字して蓮杖と呼ぶ蓮杖の號此に始る袋日菴川の一族を津久井に移さんと欲し倉皇京に上るとき杖を山口に托したりしかの之を収めて江戸に還り又た下田に行く漂民欠乏所下田に設けられてより外船の來征漸く繁く寫眞を學ぶの便宜あるべきを以てなり安政三年七月米使ハルリス來朝して圖書を呈し神奈川開港の事を商議すハルリス通辨ヒユースケンと共に下田に上陸し其乘艦を本國に返して玉泉寺に掩留

し奉行井上信濃守中村出羽守談判委員として應接し年を越て尙ほ未だ決せず蓮杖は外使の給仕役となりハルリス及びヒュースケンに親み間を得て寫眞術を研究せんとするも未だ其機を得ずハルリスの玉泉寺に滞在せる間本國の艦船時々來往して消息を通す一將下田に上陸し欠乏所に憩ふ蓮杖外人の接待係りなるを以て往て其傍らに侍せしに船將自國水夫の欠乏所に入て保命酒を買ひ瓶子を倒にして其口より飲むを見て之を呼ひ瓶子を取て掌に掬して其臭を嗅て悉く之を他に捨て空瓶を水夫に返し又た硝子瓶の欠片地上に散落するを見蓮杖をして之を拾收せしめ靴を指して日本くといふ蓋し邦人は靴を穿たざるを以て足を傷けんことを懼るゝ也蓮杖彼か意を用ふるの深きに感す而して更に蓮杖をして感せしめたるはペルリの教養となす或る時齡十四五の少年水夫あり欠乏所に來て物を買ふ是れ前年

來朝せし提督ペルリの子なり我吏之を款待し通辨一人同心を附し蓮杖下田の地理に精しきを以て嚮導者となり諸所を遊覽す行くく道見橋に至る少年水夫同心を顧み通辨して其職務を問ふ曰く同心なり曰く卿より下級の者あるか曰く是れありと蓮杖を指す彼れ又た更に問ふて曰く尙ほ下級の者あるかと因て之なしと答ふれば彼れ乃ち同心に歸り去らんことを求めて曰く我は船中に在て最下級の職務を執るものなり父ペルリは功を以て重任を負ひ貴國に使ひせしと雖も我は身寸功なく職務極めて卑し宜しく地位最も低き人に伴ふへしと同心の接伴を固辭し蓮杖に伴はれて遊覽すハルリス玉泉寺に於て熱を患ふ蘭法の醫師伊藤寛齋を遣して治療せしめ夜々我吏交るく往て看護し蓮杖も亦た行て給仕す

息無聊に堪へず問談の際西洋に於ては馬に蹄鐵を嵌す

ると聞き其后騎術に巧みなる調役菊名仙之丞喜て公儀允許を得て米艦の碇泊中其鍛工を借りて蹄鐵を鍛冶せしめ下田の鍛工を集めて其術を學はしむ日本に於て蹄鐵を用ふるに至りしは此時に始まるといふ

既にして蓮杖ヒュースケンと親み善し彼れ少しく寫眞術の要概に通するを以て密かに其法を問はんとす幕吏の知るを恐れ相約して嶽山に登り山中無人の地に於て教を受くヒュースケン樹枝を折て三叉を作し紙を筒に擬し蓮杖をして携へ來らしめたる鏡を取り蓮杖を鼓歩の外に立たしめ撮影の状を示し硝子板に藥液を塗沫して寫すこと及び暗室に於て調理する事等を語る然れども當時固より器械藥液の舶齎せるものなければ纏かに其形容を聞けるのみ然りと雖も蓮杖畧ほ其狀を知り且つヒュースケン一葉の寫眞を持來て蓮杖に贈れるを以て家にあるの日人無きを窺ひ函を穿ち竹筒を挿入し眼

鏡の球を取て之に嵌し裡に一鏡を置き物像を映寫して撮影の理を研究するに至れり

安政五年七月ハルリス江戸に登りて將軍に謁す下田より江戸に至る途上恰も小諸侯の參勤に均しく從者は鷲章を附しハルリス及びヒュースケンは共に轎に乗る其轎は寝ぬるに便ならしめ普通の轎よりも長大なり九段坂下の番所調所に留り謁見終て横濱開港の事決し一行下田に還り尋て横濱に移る蓮杖事を以て下田に止ると半年許亦た横濱に至て寫眞術を研究せんと欲し姑く奉行の下番役となる下番役なるものは外來の艦船を出張して檢査するの職なり時恰も江戸城炎上の後所營の工事あり董川隱所に勤仕して公務多繁なるを以て蓮杖を招き揮毫を助けしめ事終て金百圓を贈り報償す蓮杖之を受けて横濱に還り米國の商人ショーヤの囑を受け洋風の畫を描く謂はゆるパノラマ是れなり蓮杖洋風の

畫具を使用することを知らざりしもシヨイヤの妻其術を知り蓮杖に傳へて描畫せしむ畫題は日本の景色風俗にして版の大きさ十尺幅十二尺總て八十六枚一年を經て完成したり是より先き米國の寫真師ウンシンなるもの始めて本邦に渡來しシヨイヤの家に寄寓せしかは蓮杖機至れりとなし問ある毎にウンシンに就て寫真術を學ぶを得たり然れども言語通せず且つウンシン吝て秘して教へざること多く勞多くして功を收むる甚た少し時に横濱在留の宣教師の女ラウダなるもの亦ウンシンに就て寫真術を學へるより蓮杖之を拮頑して畧ほ其術を窺ふを得たり蓮杖の畫成るやウンシン之を携へて本國に歸り蓮杖は其寫真器械を買収しウンシンの居室を以て直に其寫真場に供したり技未だ熟せずと雖もウンシンを知れる者來て撮影す而して日本人は未だ二人の來て撮影するものあらず否な未だ世に寫真術なるもの

あるを知らざる也居ること半年許シヨイヤ其室を要する事あり即ち此を去て戸部に家す始めウンシンの去るに臨み蓮杖ウンシンの加合したる藥液と未だ加合せざる藥液とを併せ買ひ先つ加合したる藥液を使用したり然るに其量限りあり久しからずして使用し盡し自ら藥液を加合せんとしたるもウンシンの教授粗鹵にして分量を知らず彼のラウダはウンシンと同國人なれば言語通するを以て親み善かりしを以て秘奥を聞けるならんと想ひ往て之れを問はんと欲したるも彼れ亦たウンシンの去りて後幾干ならずして歸國し問ふを得ず此に於て獨力藥液の加合を考究し或ハ此を減して彼に増し此に増して彼に減し家を寫し樹を寫し器具を寫し又は吾妻を影すに影像模糊として眞を得ず研究一年餘寢食を忘れて刻苦したるも意の如くならず債を負ふこと二百五十兩の多きに至る然れども蓮杖屈せざる也

初め戸部に移るや資力乏して暗室を造る能はず雪隠を塞て代用す家主のために拒まれ屋臺店を買て暗室とす當時硝子は既に輸入したるもダイヤモンドを嵌したる硝子切を得る能はず只たシヨイヤの家に一本を藏するのみ因て硝子を携へてシヨイヤの家に至り借て切る一枚を切る價百文なり其不便推して知るべし一年の勞苦得る所なく剩す所の藥液は僅かに數葉を寫すに足るのみ蓮杖備さに辛酸を嘗め盡して肉落ち骨露れ憔悴鬼の如し一夕悄然として妻を顧み先つ曰く今や吾家赤貧洗ふか如く負債日に積み志業成らず是れ命なり明日尙ほ未だ寫らざれば吾れ汝と共に家を脱して逃亡せんのみと是より先き妻君蓮杖の寫真術に焦思して身體日々に疲瘠するを見屢々之を諫め假令ひ道に食を乞ふとも再び寫真術に心を勞する勿れと切に請ふて已まざりしも蓮杖敢て肯せざりしか今や百方計盡きて蓮

杖血泣するを見妻君亦た泣て語なし次日早起器械に向ひ沈思稍や久しく一物を寫す取て檢するに模糊たること前日の如し二項三項に至て依然相同し竟に午を過く願れば藥液は只た三四葉を寫すの料を剩すのみ蓮杖食餌喉を下らす神倦み氣飢え椽に倒れて言はれす既にして又起て試寫すること一再忍ちにして影像歴々故面に印す蓮杖驚喜して手の舞ひ足の踏むを知らず妻君亦た喜ひ禁せず蓮杖直に其寫真を携へ友人を問ひ之を示して若干金を借り藥液を買はんとす然るに當時未だ藥液の輸入したるものなし否な之あらんと雖も蓮杖其名を熟知せず藥店は藥名を知ると雖も寫真に用ふる藥液なるとを知らずエーテル硝酸銀の如き之れなきにあらずと雖も醫師にあらざれば用ひざる物となし醫師も亦寫真に用ふる藥液なるとを知らず蓮杖大に窮せりと雖も百方探索し辛うして若干の藥液を得たり

恰も好し新見伊賀守村垣淡路守曾て米國に使ひし寫眞の何者たるを知る董川の弟子董圓寫眞術を修めて横濱に在りと聞き客を會して召して寫さしむ戸川播磨守亦た之を聞て寫さしめたり時未だ紙版の舶齋せしものなし通常の西洋紙に鹽を引て代用したり蓮杖歸途江都の景色を撮寫せんと欲したるも浪士輩の認むる所とならば奇禍を受へきを以て密かに轎丁に命し途に轎を停め休息の体に装ひ中に器械を据へ籠の間隙より鏡頭を出し以て江戸城を首め市街の光景を撮影し十四五種を得たり當時未だ公賣するを得ざりしを以て深く藏して人に示さず後ち之を販賣するを得るに至り外人に賣て巨利を得たり然れども其横濱に歸るや手に一金を止めず窮乏前日に譲らす然るに嚮きに奉行所下番役たりし頃の扶持米賣得金若干を割戻されたるを以て之を資とし野毛に一の床店を借り近傍の農家の庭を借て寫眞場に

供す米人支那人等傳聞して來り寫すものあり因て横濱の市中に移らんと欲し衣類器具を賣て四兩二分を得三兩を一月の家賃に納れ一兩一分餘を以て移轉の雜費を支辨し辛うして辨天通に移る剩し得たるは纔に一分二朱に過ぎず亦た復た寫眞場を得ず客ある毎に近隣の土間を借て寫し傍ら東都錦繪を買來て之を外人に賣る元價二百五十文にして賣價一貫文なり又た四分板を買ひ一枚を六片に切り油繪を描て賣る一日にして二兩三兩を得旬日を出てすして廿五兩を蓄積し家屋を修理して寫眞場を造る其家恰も崖腹にあり物干場は崖上と高低相均しき以て寫眞場とし歐文の招牌を掲けたり外人日に厩至し一ヶ月にして二百五十兩の債を償却するを得たり時に知人其女をして外人の妾たらしめんとする者あるを聞き之を憐み父母に説て其女を吾家に伴ひ來り客に給仕せしめしに外人小女を寫すを好み一回に二弗

三弗を與ふる以て女の父母亦た大に喜ひしか女病を獲て危篤なるに及び是れ屢々寫眞して精氣を枯し壽を縮めたるものなりとし父母蓮杖に迫りて回復を求め蓮杖辨解に苦み川崎大師に祈願し寒夜神前に水垢離を取て回復を祈るに幸ひにして女の病平癒して責を免れたり又た蓮杖毎朝寫眞場に上りて旭日を拜するを例とす一日毎の如く旭日を拜し指頭を揮てリン、ヒヤ、ウ、トウ、カイと呪文を唱ふ隣家の主人一見驚て曰く蓮杖は切支丹なり果然寫眞は魔術なりと大に蓮杖を嫌忌したり當時邦人の寫眞術を嫌忌したるは獨り隣家の主人のみにあらざる也

外人の來て寫眞する者日一日より多く而して奇を好むの心より和装をなし甲冑上下を纏ひ甚しきは假髪を冠し而して其男たると女たるとを問はず又た和装をなす者皆な洋装の上に衣袴を着くるを以て姿勢整せず且つ

粧を左し大小を右す或は酒宴の席に下駄を置き屏風の傍らに石燈籠を据ゆるの怪をなすものあり蓮杖其不可なるを説き改めしめんとするも彼れ應せず爾かも客常に群集して一々に諭し改むるの違あらず已を得ずして其爲すに任かせたるもの多し外國に印行せる書籍に怪奇なる日本風俗を圖せるものありしは多く是に胚胎せりといふ又た外人の日本處女の寫眞を愛すること甚しく價を吝まずして購ひ去る然れども日本人の寫すものなし故に蓮杖自ら多額の報酬を與へて女子を撮影したり蓮杖一日辨天通に出て路上に器械を据えて遠近の風景を寫眞し居たるに忽ち浪士輩四五來て器械を奪ひ去らんとす蓮杖追ふて百方辨解し纔にして難を免れたり浪士輩の來て蓮杖を窘めたるは皆に一再のみならざるも事なきを得たるは僥倖といふへし

寫眞術を以て魔術なり壽を縮むるの法なりとして邦人

の痛く嫉忌するころ信州の人某遙かに蓮杖の名を聞き老父を轎に乗せ来て撮影を求む蓮杖大に喜ひ懇に待遇し其父子を撮影したることあり又た蓮杖辨天通に開店するの初め太田の陣屋を統轄せる鈴木某来て寫眞し爾後屢々来て相親みたり鈴木は信濃の人なり一日蓮杖に語るに佐久間修理先生(佐久間象山の)は我藩の俊傑なり夙に西學を修め寫眞の理の如きも考究を試みたることあり然れども餘暇を得ずして已めりと聞く今日郷の斯術を我國に開きしを聞かば其喜ひ必せりと蓮杖爲めに洋人の影像一枚を鈴木に托して先生に呈す其後鈴木來り報して曰く先生寫眞を得て大に喜ひ他日機あらは蓮杖を見んと云へりと不幸短命にして遂に遇はず既にして邦人の迷想稍や消散し蓮杖の門に來り寫眞するもの漸く多きに至る生麥の變ありし時蓮杖恰も辨天通に在て業を營めり横濱市中の人民荷擔して難を地方

に避け騷擾云ふへからず然れども蓮杖意とせず業を營む毎の如し時に諸藩の士死を決して出戰せんとする者父に紀念せんため武具を裝ひ長槍を提げ來て寫眞するもの多し此間シヨイヤは騷擾の日ならず鎮靜すへきを察し蓮杖を勸めて業を營ましめ已れば市中を奔走し騷擾に乗して廉價に器具を買収し蓮杖の家に托し諸種の什具積て山をなすに至る而してシヨイヤの言誤らす騷擾數日にして止む

函館の人横山松三郎か來て蓮杖に寫眞術を學へるは此頃の事なり松三郎は夙に露人に就て洋畫を學ひ尋て寫眞術を學はんと欲して得ず幕府の用艦健順丸か香港バタビヤに航するに際し香港に航したるも香港の地未だ寫眞術を知る者なく意を果さずして香港より歸り蓮杖の早く既に横濱に開業せるを聞き來て蓮杖に見え志を告ぐ然れども蓮杖辭して教へず是れ他故あるにあらず

阿兄某蓮杖の寫眞術を修めたるを奇貨とし教授せんとを求めたり然れども蓮杖其志望の固からざるを知て許さず故に亦た松三郎の請に應せざりなり然りと雖も松三郎志極めて切にして連日來り請ひ午食の時を除くの外は門を出てす晨より昏に至る迄悃請して已ます斯くの如きもの十日阿兄蓮杖の已に教へざるの故を以て松三郎に教ふるを拒み終に之を逐はんと欲し箒を執りて掃ふに至る然れども松三郎辭色を動かさず悃請初の如し蓮杖其篤志に感し遂に松三郎の入門を許し扇子一對を持來らしめて師弟の約を結び藥液の加合より撮影を終るまで多年研究し得たる所を擧げて松三郎に傳授し松三郎をして已を寫さしむ蓮杖場に坐し手に一箇の錐を持ち松三郎をして器械を執らしめ錐の落つるを見は鏡を蓋ふへしと告ぐ松三郎教の如くし初めて撮影を試みたり其撮影したる硝子寫眞は松三郎の死後今ま

尙ほ其家に藏せりと云ふ松三郎傳習を終るの後江戸に開業し蓮杖は尙ほ横濱に在り深く松三郎の才幹を愛し苟も斯術に益する事は一も遺す所なく松三郎に示して其研究を助け石版術の如きも松三郎に傳へて世に行はしめたり故に松三郎亦た蓮杖の義に感し身を終るまで恭敬師事したりといふ

蓮杖か石版術を松三郎に傳へたるは其江戸に開業したる後なり米人シヨイヤの妻の妹婿ビジンなる者製圖師にして石版の術を知る蓮杖之と交を結び其勧誘に従ひ石版器械を購求し且つ其術を傳習せり蓋し石版印刷は是より先き天主教宣教師某か用ひたることありしも其術未だ粗笨にして濃淡の限取をなすを知らざりき蓮杖ビジンに傳習してより試みに家康公の肖像を圖して石版に附す當時江戸に於て石版術を研究し居たる玄々堂(此玄々堂なるものは石版印刷して販賣するの元祖な

り銅版は玄々堂の父なるもの司馬江漢に學ひて初めて製造販賣するものなり。及ひ石井鼎湖等四五輩も屢々來て之を見る印刷成るや蓮杖簡を飛して松三郎に報す松三郎即時簡を握て馳せ至り挽留十日許にして其術を習ひ東京に歸るの後更に改良を加へんと欲し室を鎖して他人の見るを禁し功成るや之を龜井至一下國隈之助等に傳ふ龜井至一後ち玄々堂に聘せられ石版畫大に世に行はるゝに至る

慶應年間蓮杖一たひ下田に歸省し姓を下岡と改む下田に生れたるも幼時岡方村の土屋善助に養はれたるを以て取て名としたる也妻を下田に留めて横濱に歸る慶應三年地を太田町に相して家屋を建築す一夜夢に富士山幾む其下に茅屋あり大樹傍らに生し一壺あり其中央に懸り蛇ありて壺を窺ふと見覺めて奇とし之を寫して招牌とす此招牌を門に掲けたるの日米國の宣師教來り見

山中に留ること半歲廟廓の壯麗山水の奇趣悉く撮影し遂に庚申山に及ふ其瀑布を寫せし時の如き何れよりするも樹石の障礙ありて絶奇の狀を盡くす能はず松三郎即ち崖腹の大樹に繩を纏ひ其一端を以て身を縛し器械を背に負ひ人夫をして徐々垂下せしめ千仞の絶壁を下りて谿底に立ち意のまゝに撮影したり松三郎の事に當りて熱心なる概ね此類なり

日光山の寫真成るや先づ之を徳川公に献す公二人の勞を稿ひ献上袖を賜へりとそ蓮杖又た泉岳寺に至て赤穂義士の木像を寫し又た聖堂の木像を寫したり(當時蓮杖に従ひしは二代目鈴木眞一幼少の時なり)聖堂の木像は孔孟子思顔淵の四体にして木像參拜と稱し正月元日を以て幕府の儒者に禮拜せしむるの外は絶て人に示さざりしものなり當時攝寫したる寫眞は今尚ほ博物館に藏せりといふ

て古昔西洋開關の始め蛇あり人類に藥を教へたりと傳へ今日に至るまで藥を以て業を營む者は好て蛇形を用ふ願ふに卿の業も益々榮ふるならんと事素より偶然なれども蓮杖の業是より日を逐て昌盛せるも奇といふへし最初横山松三郎次に臼井秀三郎、櫻田安太郎初代鈴木眞一二代眞一江崎禮二四身清七櫻井初太郎平田玄章西山禮助(以下略)前後其門に學ふ幾何もなく火災に逢かて家を失ひし器械は石庫に藏せしを以て災を免れたり明治元年一月三日本町に移轉す移轉の初めより客日々に群集し毎朝門を開かざる前より客來り日没するも尚ほ跡を絶たず力士雲龍不知火兩國朝日嶽俳優高助多賀之丞輩亦た屢々來り寫すに及へり

明治二年蓮杖松三郎と謀り松三郎をして日光山を寫眞せしむ前年來る時要請して漸く寫眞するの承諾を得たるなり蓮杖資金五百圓を抛ち松三郎亦た百餘圓を費し

明治五年七月廿一日夜横濱に碇泊せる米國郵船火を失す時に雨降りて夜色晦冥咫尺を辨せず火光甚だ鮮明也蓮杖弟子眞一(二代眞一)をして器械を携へ行て寫さしめ翌日より之を販賣して大に利を得たり又た曾て一米人の報によりて特に一枯木を寫したることあり横濱の地たる元と漁村にして本村と辨天社の近傍を除くの外は索漠たる所なりし今や英國領事館の在る近傍は水神の森と稱し有名の大松樹あり然るに大火の際松燒けて枯木となり久しく存在し觀る者其奇古を愛せしに何人か之を伐採せんとするを米人見て痛く之を惜み馳せて蓮杖に報し彼の松樹は横濱の一奇跡なり脚速に往て寫眞せよと蓮杖其言に應し倉皇行て器械を道傍に安し角度を正して鏡を蓋ふと共に松樹は倒れて地に落たり米人大に喜び多く其寫眞を購求して本國に送りしといふ蓮杖寫眞術を營むの傍ら外國より馬車を購入し東京横

濱間に乗合馬車を開業せんとす時に紀伊の人由良守應東京に於て京濱間乗合馬車往復の允許を得たりと聞き之と協同して馬車業を營む是れ我國乗合馬車の嚆矢なり京濱間鐵道開通するに及び之を廢す其頃宣教師ゴブルなる者あり我か荷車と彼の馬車とを折中にして人力車を工夫し圖して蓮杖に示し蓮杖をして開業せしめんと謀りしことあり蓮杖神奈川川崎附近の橋丁等の乗合馬車の開業してより其業を奪はれしを憤り屢々妨害を加ふるに苦み此の人力車を授けて彼れ等に挽かしめんとするの意ありしも事繁くして果さざりしに幾干もなく其圖を失したり然るに偶々東京に人力車を製造するものあり其製ゴフルの工夫に同じかりしを以てゴフル已に告げずして製造せりとなし蓮杖を責め辨解に苦めることあり蓋し其圖轉輾して他人に製造せられたるものなるへし

蓮杖爾後地の業に従事せず専ら寫眞を以て門戸を張る後閑を得て函館戦争及び臺灣戦争の圖をパノラマ畫に描き後年(明治九年)東京淺草に場を開きて展覽せしめたり是れ我國(此パノラマは故ありて守田寶丹の所有となり當時九段の遊就館に保存す)パノラマの權輿にして其の國の材料は已れの知れる所及び實歴したる者の談話によりて集め臺灣戰圖の如きは當時該地に出張したる岸田吟香の語れる所及び松崎寫眞師の撮影したる眞圖を參酌して作れりとぞ

蓮杖嚮に基督教に歸依し明治七年米國の宣教師バラに就て洗禮を受け身を持つること謹嚴耳順を越ゆるも尙ほ嬰鑠たり按するに日本帝國に基督教の傳來せしは西曆千八百五十九年米國宣教師ヘボン、プラン、フルベツキ三氏長崎に液來せしを始めとす(即ち今より三十二年前なり)千八百六十四年矢野龍氏初めて横濱に於

て米國宣教師ゼームスバラ氏に洗禮を受く今より十九年前即ち千八百七十二年横濱海岸教會創設せらる蓮杖亦横濱に於て洗禮を受けたる也後蓮杖東京に移住し今ま現に淺草公園内に在り

吁、蓮杖の寫眞術に於て造詣深しといふべからず然れども卒先して新技術を我國に誘入せし功や大也蓋し蓮杖と前後して寫眞術を研究したる人は或は之れあらん能く其功を奏せし者に至ては之れ有るや無しや吾れは得て知らざる也

明治廿四年十一月

辱知 山口才一郎記

明治二十七年七月二十二日印刷

同年同月二十六日發行

編輯者兼
發行所

佐藤鐵彌

東京京橋區木挽町
十丁目四番地

印刷者

三島謙三

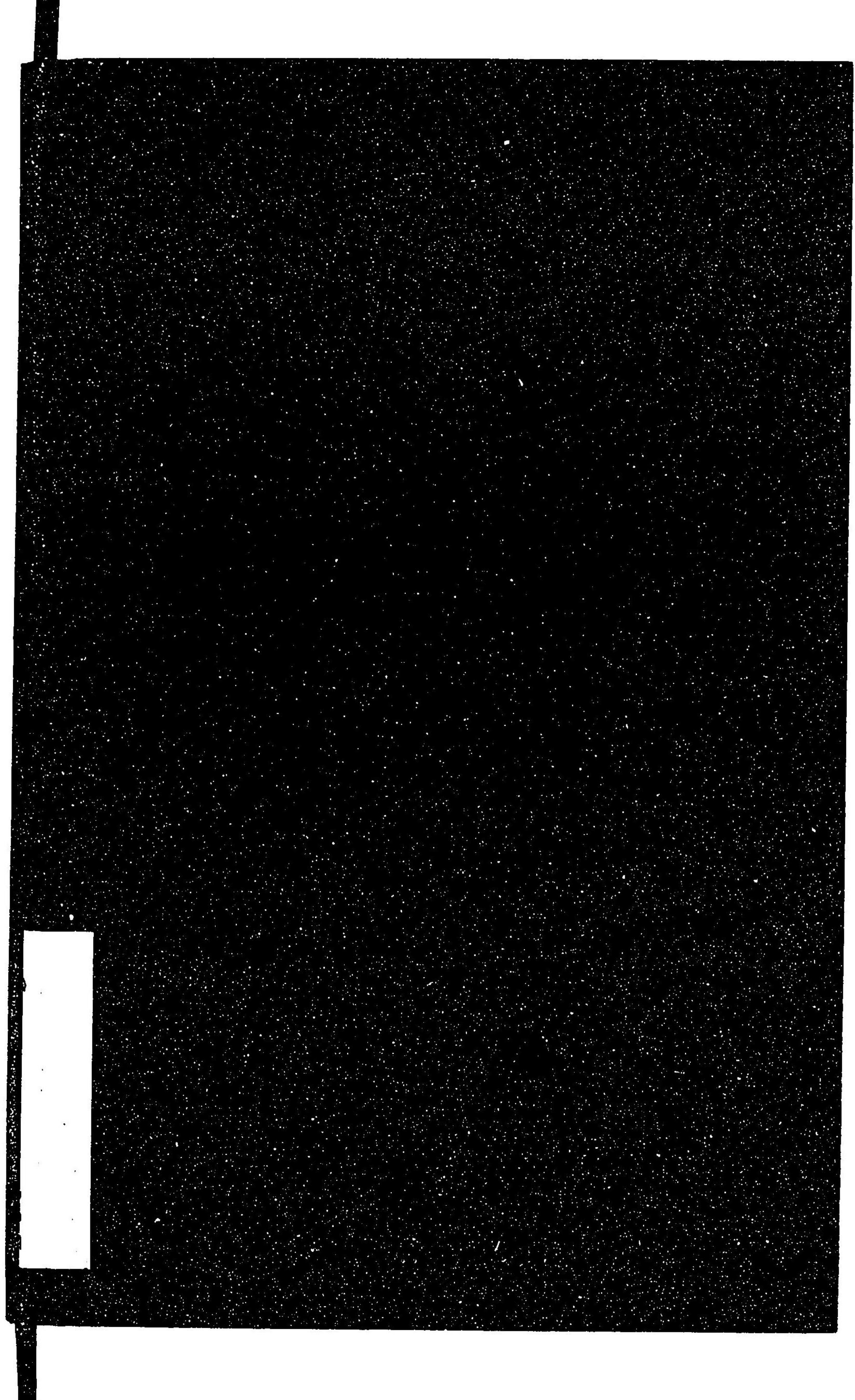
東京神田區南神保
町十番地

發行所

寫眞新報發行所

東京京橋區木挽町
十丁目四番地

2413



9

327

写真事歴

国立国会図書館

072089-000-3

9-327

写真事歴

佐藤 鉄弥/編

M27

CEE-0117



